通信第二十九號

　　　謹んで浄土真宗を案ずるに、二種のあり。一つには、二つにはなり。往相の廻向について、真実の『』あり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　教巻

　　　二つに還相の廻向というは、すなわちこれのなり。～～『』（浄土論註）にれたり。かるがゆえに願文をださず。『論の註』をくべし。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　証巻

　今年のお盆は母の初盆も加わりあわただしく過ぎました。しかし、忙しい中にも亡き人をご縁とて如来様の生きたおはたらき（往相廻向・還相廻向）にわせて頂きました。少し紹介します。八月九日の母の初盆を前に掃除、草むしりなどに追われました。「なぜこうまでして草をとるのかな」という素朴な疑問が初めて起こりました。「世間体ばかりでいやだなと思いつつもそこに生きて来たな」と思わされました。そして、落ち着けずに生き苦しさを感じて来ました。「では仏さまから見られた自分とは、仏さまのとは」・・・もし、世間という眼がなかったら、人間はどんなことをするだろうか。「ああ、世間体を嫌ってばかりいたが、世間の眼というおはたらきとなって仏様が裏からはたらいて下さっていたのか。をさせて頂いていたのか」仏様（親様）のご恩にあぐらをかいて、不足しか思ってこなかった自分が照らされました。

七月の西川先生宅の法座の時に西川先生へある若い方が質問されました。「自己を知るとはどういうことですか」と、間髪いれずに「世間を知ること」とえられました。私は一瞬、ええ、というな気がしましたが、今から思うと仏さまの智慧のを通した「世間を知ること」であったのかと知らされました。すると、単に世間体としか見えなかった世界が浄土荘厳の世界に転じられて来ました。西川先生が「天地がられている」と言われたことがうなずけました。

釋尼白蓮（久保花子さん行年九十九才寂、長仁寺の同行のの一人）の初盆法要でのご法話中に知らされました。『の主人公のは神通力第一の釈尊のお弟子さんでした。その神通力が実の母に通用しないことで深い悲しみに落とされたました。しかし、このことをご縁として初心に帰らされました。私の体験をとうして味わいますと「自分の得意な神通力では助からないぞ、お念仏に帰せよ」と、亡き母親を通しての阿弥陀さまのお呼びかけだったと知らされました。

すると、『仏説阿弥陀経』は智慧第一のに「頭が良いというのでは助からないぞ、お念仏せよ、お念仏の世界はこのような極楽国であるよ」と呼びかけて下さっていたのかと初めて知らされました。私においての『仏説阿弥陀経』との出遭いでした。

人間は何か人より得意とするものをりどころとして生きています。お金であったり、地位であったり、健康であったり、出身であったり。世間ではそれは素晴らしい事なのですが、仏法から見ると盲点になります。一番大切な法の世界であるお念仏をよりどころとすることを妨げているからです。目連尊者の神通力、舎利弗尊者の頭の良さを得意とするところが実は本当に法に帰依することを妨げていたのではないでしょうか。お念仏がないと、頭が良いとか、お金があるとか、地位があるとか、真面目である、誠実であるなどということに価値をおいてしまいます。私の場合は世間の事は差し置いて、教法、お念仏だとりしめてこれだけは人より得意という慢心。邪見驕慢の姿に無自覚でした。自我の念仏だったのです。これは決定的盲点でした。この足元の盲点を母や子供たちや妻が照らしてくれていたのです。今も進行中です。

お念仏を申せとの仏から人間への願い、呼びかけが浄土真宗の願いであります。先祖供養と思っている人がおおいのですが実は如来様が亡き人をご縁として呼びかけて下さって来たのです。法を疑い、反逆しているとも気づかずに我執、法執に執着して地獄、餓鬼、畜生の在りかたや正義や理想をりかざして苦しんできたのです。何かもの足りないこうではない、しい、何か不安になるはずでした。でもそういうことも如来の大悲のおはたらきでした。

　如来大悲の恩徳は

　　身を粉にしても報ずべし

　　師主知識の恩徳も

　　骨を砕きても謝すべし

また、Ｕさんの法事のときです、阿弥陀様のご本尊、そしてお仏飯が眼に入りましたその時です「わしに本当に帰依し、えたら、食うことはわしがそろえてやるよ」と聞こえて来ました。はっと不思議な気がしました。『浄土論註』の中に、「」（仏の願いに生きるならば必要なものは一切そろえてあげるよ）とあります。実はその願の中にすでに生かされて来たのでした。

さて、通信第二十八号には温かい励ましのお便りをいただきました。四通紹介させて頂きます。

通信第二十八号、他力回向の南無阿弥陀仏。有難うございました。私もいちど裏山の小高いところにある大きな池を見ました。長仁寺の報恩講のときに大石先生はじめ北海道や青森の同行さんたちといっしょに散歩にいきました。素晴らしい景色でした。そのときの同行さんの西後さんは昨年十一月に九十歳でお浄土に帰られました。～～～

　　家の猫、サクラちゃんも・・・そろそろのようです。食事もあまりほしがらなくなり、よろよろと歩いています。私はサクラ、ナンマンダ仏。サクラ、ナンマンダ仏と呼びかけています。仏さまは猫になって苦労しているようです。

　　もあまり念仏の声が聞こえません。私の母は台所にいてもナンマンダ仏、々。朝夕の勤行は『正信偈』をあげていました。父も母も兄も、そばにいる人皆、還相廻向でありました。

　　人間に生れて本当によかった。・・・有難いです。風呂上りは自分の身体を拝んでいます。

　尊いお身体お大切に、お育て有難うございます。

秋田県由利本荘市　　　高橋　つね

　つねさんはご尊顔を思い出すだけで心が明るくさせられるお同行さんです。長い間物心両面にわ

たってお世話になってきました。つねさんのお世話で秋田県へ二度もお伺いさせて頂きました。念

仏交流会、念仏同朋研修会にも東京、青森、九州、広島など欠かさずに参加されました。炭がある

限り最後の最後まで燃えておられる念仏のお同行であります。

　　立秋とは名ばかりの暑い日が続きます。お元気のことと拝察申し上げます。

　　通信二十八号は如来大悲のご廻向が満ちれておられお念仏せずにはおられない「通信」と味わせていただきました。

　　　ご廻向の旅はお母様から始まって、叔母様、伯父様と相次ぐの後、同朋会館の養泉寺奉仕団のご縁、西川先生宅のご法座などと目まぐるしい法縁の日々、圧倒されるようです。

　　　このところの暑さは耐えるのが命がけです。毎年巡ってくる季節です。～～～齢八十五年以上も生き延びると「もうこれで十分」と思う反面、命がしいのが欲です。ご廻向は絶え間なくっているのに、それが消えているのです。十年以上も前に前立腺ガンを患いながら全快、最近また、大腸が疑われましたが心配なさそうでホットしている私です。生きる喜びはご廻向です。生きる歓びを忘れて惰性で生きておりました。忘れていたことをらせていただいた「通信二十八号」に「南無阿弥陀仏」。

　　令和元年八月十日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　東京都板橋区　　江島晃教

　江島さんご夫妻は長仁寺の朝参りに朝四時過ぎに宇佐市の家を出て十年間くらいほとんど

かかすことなく通われました。朝参りは勤行の後、大石先生のご書信の輪読、ラジオ体操と厳しい

中にも楽しいひと時でした。何より生きる力を与えて頂きました。江島さんは読売新聞社の大分支

局長を歴任されました。豊富なご体験から社会の動きなどをたくさん教えて頂きました。東京に行

かれて十年位たちましょうか。東京で聞法されておられます。

　通信二十八号を読まれて、二十一号をもう一度ぜひ読みたいとの要請があり二十一號を送らせて

頂いた後にうれしい便りがありました。

　　江本常照先生

　　　通信第二十一号拝受致しました。御母様の回心の様子、有難いです。

　「『正信偈』には何がかいてある？」

　「**真実」**

二文字なれども、ただの言葉ではありません。信心の智慧からでる響きですね。

「真実」に導かれて愚か者がヨチヨチと大道を歩んでおります。

　「通信」は真実報土からのお便りであると頂戴いたします。御法体くれぐれも御自愛下さい。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　大阪府泉北郡忠岡町　　　　萬福寺　亘　良樹

さんとは西川先生宅でのご法座でご縁を頂きました。「若い熱心な僧侶がおられるな」という

印象でした。母が回心までしたのかはわかりません。しかし、私の前で顔の相が変わり、思いも

しなかった言葉が母の口から出たことは事実です。私自身が「弥陀をたのまされた」のも事実で

す。それがなければこうしてこのような便りを頂いたり、このような文章が書かされるはずがありません。不思議な事実です。

　最後にもう一通です。読みかえして、大事なお葉書であることを知らされました。私自身が永

い間こういう状態でありました。

　　歴の上では秋だそうですがこの暑さ、身の置き所がありません。すっかり遅れてしまいましたがこの度はお母上様がご逝去なされました由、心からお悔やみ申し上げます。

お母様が仏様となられてつぶやかれたお言葉の数々とても感動して拝読させて頂いております。救いから遠い私だと思うにつけ、本当にそれが知らされたら、助けていただける筈なのでしょうが？。なぜか私は仏様の境地に導かれようとしないで仏様を私の我執に引きずりおろしているから、本願も信心も念仏も、いつまでたってもわからないのだと教えていただいて、それをかみしめております。南無阿弥陀仏、どうぞ御身お大切に

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　広島市　　中塚　那枝

人間には理解する能力がありますから、どうしても理解力で助かろうとします。よく大石先生

は「わかっちゃいけんのよ」とおおせられました。なぜ、わかったらいけないのか。それがわかりませんでした。法は理解ではなく目覚める世界です。人間の理解力では受け取れないのです。親鸞様が大切にされた「謹んで」とか「ひそかににおもんみれば」という聞法姿勢です。

私はあのい先生（大谷派元宗務総長、同朋会運動の提唱者）から叱られたことはほとんどなかったのですが、「こら！学者」と言われた時は、誰の事をいっているのか。まさか私の事を言っているのかと、耳を疑ったことがあります。自分の力で理解して助かるという姿勢を指摘されたのでした。でもその時は解りませんでした。また、訓覇先生が「にぎって、離して、こうから」と言たことがいつまでも忘れられません。今、私なりにみいて見ますと「しっかり聞法して解って、我執でにぎってそのために苦しみもがいて、にぎっていること、すなわちの罪に目覚める。すると目覚ましめたもうこうからのご廻向の願いに生かされていくことになる」それが念仏行者の歩みです。苦しみもがきがでないということはの罪が自覚されないということになります。そこで、すべてを教学でかたずけてしまうことになりがちです。たとえば家を建てるとき、足場が必要です。しかし、瓦がふかれてしまったら、足場を崩さないと家の完成に成りません。まして、門から進んで家を自由に入出することはできません。親鸞さまが「」にお書きになっています。

さて、表題の還相廻向の親鸞様のお教えに移ります。還相廻向について、大石先生が長仁寺のお

の机の上で私の真宗聖典を開かれて、「二つに還相廻向というは」というところを指さされました。その時私は『浄土論註』は還相廻向として頂きなさいと知らされました。それまでの勉強姿勢は理解する、詳しくなる。という在りかたでした。ですから、大石先生の境涯とは別次元の世界でした。先生は机に『浄土論註』一冊を置かれていました。その一冊は、二部屋いっぱいの私の蔵書を紙屑のように感じさせる力がありました。私の知的理解の在りかたが深く、厳しく問われたのでした。

物事には表と裏があります。私は何か表だけの勉強で救われる、人より仏教の勉強をしてれて

いると勘違いしていたのでした。しかし、このことを受け入れることは難しい事です。これまで積み上げて来たものがされる事ですから自分からは出来ないことだったと今にして思わされます。

如来さまの還相廻向のはたらきによって法に反逆し背く私自身の在りかたを照し続けて下さっていたのです。すなわち、私において、悲劇の出来事、苦手な人、嫌な人となって私の在りかたを照らし、「法に帰依せよ、お念仏申せ」とずっとはたらき続けて下さっていたのです。今でもそうなのです。還相廻向のおはたらき無しに、往相廻向は成り立ちません。浄土に往生することも還相の廻向によるからであります。還相の廻向を知らずして自らの理解力で救われようとする在り方は如来を疑っていることなのです。の姿なのです。二十五、六歳の頃本を読んで解ったと喜んでいた私を厳しくしかってくれた藤谷秀道のお慈悲はそこにあったのかと今は思わされます。私は裏のこころが解っていませんから、なぜ、なぜと不足をいっていたのです。

私は大石先生から教えや教学が業苦にあえぐ人生の救いとなり、力となることを教わりました。あえて恐れずに言うと還相廻向の生き方、生活の仕方を手取り足取り教えて頂きました。その時はただかれるだけで何が何だかさっぱりわかりませんでした。

大石先生にお遇いしてから八年目たった四十七才のとき、中学二年生の娘に赤ちゃんが産まれ

ました。小学校五年の不登校から発展していった事件でした。大石先生は浄土の準備が熟しての

事件と見えていたのでしょう。にっこり笑われて「白隠禅師は見覚えの無い赤ちゃんを渡されて、

乳をもらいに歩かれたよ。あなたも赤ちゃんをいて皆の前へ出ていきなさい」と、「白隠禅師は実の赤ちゃんでないから」と、私は心の中で反発しながら、それでも、先生の後押しで隠すことなく前へ進むことが出来ました。先生に出遭っていなかったなら私は自分の業に押しつぶされてどうなっていたのかわかりません。先生にお遇いして人生の方向が浄土へと向けられました。それまでは世間の延長線の仏法であり、生き方であることに何の疑いもありませんでした。

勉強について思い出すことがあります。私の大谷大学時代の授業で一番魅かれたのは名古屋大

学名誉教授の岸本先生でした。先生は念仏者であり精神医学の研究者でした。名古屋大学は定年され八十才を過ぎられたお年寄りでしたが、深い清潔な風格が滲み出ていました。あるとき、「Ｙ先生の本をよく読んでおられる方にノイローゼになってこられる方が多いのはなぜですかね。」とぽつりとらされました。

今から思うと表面的に頭で永遠界、絶対界の世界をつかまえられるという姿勢からではないかと思わされます。実は私自身がそういう在りかたでした。大石先生の「わかっちゃいけんのよ」という願いはそこにあったのです。だから聞法の姿勢が大事だとそこを厳しく育てて下さったのです。聞法の姿勢があやふやだといくら勉強しても聞法してもお浄土は開かれて来ません。蓮如さまのにあります。

それ、八万の法蔵を知るというとも、をしらざるを愚者とす。たとえ一文不知の尼入道なりというとも後世を知るを智者といえり。しかれば、当流のこころは、あながちに、もろもろの聖教をよみ、ものをしりたりというとも、一念の信心のいわれを知らざる人は、いたずら事となりとしるべし。

後世の世界、すなわち浄土の世界は人間の理知の延長では開かれて来ません。ここがもどかしいところです。どうしてもどうどうめぐりして頭で理解しようとします。「それはよくわかるのですけれども」と。

先生は「『観無量寿経』は方便として軽くうが大事なのよ」といわれたそうです。『観

無量寿経』では家庭内の悲劇がとりあげられています。実際に業に苦しむイダイケ夫人がの凡夫までげられて、お念仏に救われる事実が説かれています。藤解先生はそういう育て方を大石先生にされたのです。藤解先生は真言宗の勉強を若い時期にされました。それであの人は真言宗だと陰口をいって遠ざけた僧侶がずいぶんいたそうです。本物は世間からは理解されず遠ざけられるという皮肉な事実があります。大石先生も藤解先生も木辺派ということもありますが、私は京都に十七年間もいて、大石先生や藤解先生のお名前は聞いたことがありませんでした。私は自分が本当に救われるならば派は関係ありませんでした。いや何宗であっても本当に救われる事の方が大事でした。だから、いろいろな新興宗教の人の話を聞いて見たり、臨済宗のお寺に一年間下宿したりしました。

私は幸いにもよき師よきに遇わせて頂きました。そして親しく近づかせて頂いて長い期間お育てを頂いただきました。先生が還浄されて十一年間たってようやくこの頃お教えが聞こえて来ます。

長仁寺のご法座が終り先生を中津駅にお送りする時の車中で突然に、「したら、必ずを生ずる。利他することによって自利が証明される」と言われました。大事なことですからこころの深くに入りました。これは『浄土論註』ののところに説かれています。還相廻向のおはたらきです。自分が本当に救われたら（自利満足）必ず人の救われることを願うこころが誕生する（利他）。人が救われることによって、自らが本当に救われたことが証明される。自利・利他ともに仏力による。ですから大石先生がよく言われました「自分の力で子どもや人をどうこうするのでない、まずあなた自身が本当に救われなさい。救われたら自ずと仏の願いに生きるようになってはなされる」と、今そのことが還相廻向のおはたらきとして生きて私に響いて来ます。仏恩、師恩かぎりなしです。

最後にふと、「阿弥陀仏にたのませ、救うが還相廻向、たのむは往相廻向」と知らされます。いずれも、仏力、本願力のなせるでありますから南無阿弥陀仏は仏恩報謝のお礼であります。

　　南無阿弥陀仏の廻向の

恩徳広大不思議にて

往相廻向のには

還相廻向にせり

　　令和元年八月二十八日

常照